

官邸崩壊

高嶋哲夫

第八回

第七章 脱出

1

明日香とスーザンは結束バンドで後ろ手に縛られた。

二人はライアンとマギーたちによって、地下の官邸監視室に連れて行かれた。官邸内の監視カメラのモニターと、通信設備を制御する部屋だ。

「アメリカサイドがプリンセスと話したいそうだ。よほど重大なことからしい。おとなしく俺に従ってくれ」

ライアンがスーザンの肩をつかみ、乱暴に椅子に座らせた。

「プリンセスが命令に従わない場合は、この女の命がなくなる」

明日香の額ひたいに銃口を押し当てた。

ライアンが親指を立てて合図をすると、マギーが通信機のスイッチを入れる。

「時間がかかったな。ギリギリセーフといったところだ。プリンセスと通信機器の用意はいいか」

スピーカーから初めて聞く男の声が流れてくる。明日香にも理解できる訛りのない英語だ。

ライアンがスーザンの髪をつかんで乱暴に顔をマイクの方に向けた。スーザンが微かな悲鳴を上げる。

「手荒な真似はするな。彼女はドナルド大統領の娘だ」

ライアンが両手を広げ、肩をすくめて驚いた仕草をした。

明日香も思わずスーザンを見た。スーザン自身も信じられないという顔をしている。

「何かあるとは思っていたが、娘だとはね。孫の方がぴったりんじゃないか。俺は大統領の女とばかり思っていた」

「これからは三者会談だ。ホワイトハウス、日本の総理官邸、そして我が拠点だ。きみたちは声を出すな。さあ、ホワイトハウスとつながるぞ」

「なにをやってるんだ。さっさと、スーザンの声を聞かせろ」

男の声に交ざり、聞きなれた声が聞こえる。ドナルド大統領だ。

この通信はホワイトハウスともつながっているのか。

「娘が生きていることを大統領に分からせてやれ」

「さあ、何か喋れ。親父が心配してる」

ライアンがスーザンの背後に回り、小声で言う。同時に銃で明日香の頬を殴った。頬が切れて血が流れる。スーザンの身体がびくり

と動いた。

「私はスーザン・ハザウェイ。ワシントン・ポストの記者です。テロリストとは交渉しないんでしょ、大統領。私のことは関係ない。こいつらを刑務所にぶちこんで」

スーザンがマイクに向かって一気に言う。

小さな悲鳴があがる。ライアンがスーザンを殴りつけたのだ。

〈何をした。私の娘に、何をしたんだ〉

〈手を出すなど言っただろ。私の命令を守るんだ。大統領、この通りだ。あんたの娘と一緒にいる男は気が短い〉

アメリカの男の声だ。

「ちよっとお仕置きした。大丈夫、娘はまだまだ元気だ。しかし大統領、あんたの対応によってはどうなるかわからん。俺は甘くはないぞ。何度も修羅場をくぐりぬけてきたんだ」

三者の声が入り混じった。スーザンは頭を垂れている。

〈娘の声を聞かせる。すべての要求はそれからだ〉

大統領の声に、スーザンが顔を上げて繰り返し返した。

「私はスーザン・ハザウェイ。ワシントン・ポストの記者。あなたの娘なんかじゃない」

〈おまえのママ、ナンシーと会った。写真も見せてもらった〉

「そんな話、私は信じない」

〈ママはおまえの土産を楽しみにしてる。富士山の絵の入ったＴシャツ——〉

「日本の秋の紅葉のプリントでしょ。もう買ってトランクの中」
「確かにおまえは私の娘だ。必ず救い出して、ママのところに返してやる」

「それより大統領としての職務を全うして——」

ライアンがスーザンの肩をつかんだ。スーザンの顔がゆがむ。

「強がりもそこまでだ。大統領が娘に弱いとはね。聞いたときは、信じられなかったが。次は声ばかりじゃなく、顔も拝ませてやる。ここにはいろんな装置があるぜ。日本の首相官邸だからな」

「これでいいか、大統領。親子の対面は終わった。あとは我々の取引だ。通信を切れ」

「待て。スーザン、私は必ず——」

大統領の声が聞こえたが、ライアンは笑いながら通信を切った。

「あとは、アメリカサイドが交渉する。交渉の成功を祈るんだな。」

「さもなければ——」

ライアンは明日香の首筋をつかむと首を切る仕草をして、二人を立てさせた。

明日香とスーザンは三階の中ホールに戻された。

部屋の隅に、結束バンドで椅子に拘束された新崎総理がいる。

「この女は好きにさせてくれ。仲間が多数殺されている」

テロリストの一人が来て、明日香の首筋を乱暴につかんだ。しびれるような痛みが走った。弟を殺されたと言っていた男だ。背後に

数人のテロリストが薄ら笑いを浮かべて立っている。明日香は苦痛に顔をゆがめた。

「やめなさい。彼女は私を救うために動いただけ。殺すなら、私を殺しなさい」

新崎がテロリストを睨んで大声を出した。強い口調の英語だ。

男が新崎の前に行き、顔を殴りつけた。

「卑怯者。あんたたちは縛った者しか相手にできない。しかも女しか」

明日香が男に向かって英語で叫ぶ。

「そこまでだ。すべてが片付くにはあと、半日かかるそうだ。それまでは二人とも生かしておく」

中ホールに入ってきたライアンが言う。

アレンと呼ばれている男が明日香たちを見ている。

テロリストの中で唯一ブレザーを着て、銃を持っていない小柄な男だ。他のテロリスト同様、顔は無精ひげだらけだが、どこか知的な雰囲気漂わせている。常に一人で、孤独で寂しそうな目をしている。

ドナルド大統領の耳の奥にはまだスーザンの声が残っていた。

確かに、私の娘の声と言葉だった。何としても、救出しなければならぬ。

だが何か、違和感を覚える。これは今まで経済界と政界で生き延

びてきた本能ともいふべきものだ。大統領は窓際に行き、庭を眺めた。

自分自身すら知らなかったことをなぜ、テロリストが知っている。スーザンの存在。スーザンが日本の首相官邸にいること。スーザンの日程までも彼らは把握していたのだ。そして、ジェームズ・レポートの存在。なぜだ。まさか、ナンシーが――。

大統領は小さく頭を振って、その考えを振り払った。だったら、誰が――。テロリストは日本の総理を狙ったのか、国務長官か、いや、やはりスーザンだ。彼らはスーザン以外では私が交渉しないことを知っていて、私の弱点を突いたのだ。では、要求の一番の目的は――。

大統領は首席補佐官を呼んだ。

「テロリストの要求にはすべて従うことにする」

「それは問題があります。テロリストとは交渉しない。アメリカは世界に対してそう言い続けてきました。たとえどんな事情があろうと、国際社会に対して言い訳が立ちません。それにシェールオイル・ガス開発の中止は大きな問題が起こります」

一瞬の間の後、大統領は首席補佐官に向き直った。

「この件が終わったら、私は大統領を辞任する」

「しかしそれは――」

首席補佐官は大統領を見詰めたまま、次の言葉が出て来ない。

「国民もそれを喜ぶかも知れん。世界もな。元々不人気で、支持率

の低い大統領だ。私は私事を優先するつもりだ。大統領の資格はない」

「そこまでの覚悟ができておられるのなら、私は何も申し上げません」

「まず、相手が指示する銀行に、金を振り込む用意をしてくれ。次にレポートの公表だ。こうしたレポートが出たからには、アラスカシェールオイル・ガスプロジェクトは続行するわけにはいかない。環境保護庁が中止命令を出すだろう。誰も、文句は言えない」

大統領の言葉に首席補佐官が頷いた。

明日香とスーザンは中ホールの隅に並んで座らされていた。

「驚いた。あなたがドナルド大統領の娘だなんて」

明日香はスーザンに身体を近づけて小声で言う。

「私の方がもっと驚いてる。あいつ、最低の大統領なのに。アメリカの恥だと言ってきたし、今もそう信じてる」

口では言うが本心ではないだろう。先ほどの大統領の言葉も意外なものだった。大統領というより、娘を思う父親のものだ。それはスーザンが一番理解しているはずだ。

「あなたは間違ってる。アメリカ人の過半数が選んだのよ。大統領を非難することは、アメリカ国民の半数を非難すること。あなたの考えと、大統領の考えが違うだけ」

明日香は話しながらゆっくり身体を移動させた。一メートルほど

離れた壁際には、テロリストのデイパックや衣服が無造作に置かれている。煙草と一緒に、ライターが置かれていたのだ。

後ろ手に縛られたまま身体を横に倒した。手で探ってライターを握ると、素早く身体を起こした。テロリストたちは気付いていない。

その時、ライアンが来て二人を立たせ、

「おまえらがいると部下の気が散って、士気が下がる」

三階の中ホール横の小部屋に閉じ込めた。

辺りが明るくなってきた。

横田課長は指揮車の前に立ち、官邸を眺めていた。五階の正面近くの外壁に大穴が開いている。夏目はあの穴に立って、ネイビーシールズを援護していた。

夏目からの連絡が途絶えて、一時間以上がすぎている。

横田の心に今までにない不安が沸き起こっていた。

スマホを出してタップしかけて指を止めた。タイミングが悪ければ、夏目の命に係わることだ。やはりかかってくるのを待つべきだ。

高見沢に電話をしてみれば、何が起こったか分かるかも知れない。

スマホを握り直したとき、鳴りだした。高見沢からだ。

「夏目の身になにか起こったのか」

〈残念ですが、夏目はテロリストに拘束されたと思われます。人質の命を救うためです〉

高見沢が事情を話した。

〈彼女はよくやりました。最高の警護官でした〉

「きみはどうする」

〈私は夏目の上司です。救出に向かいます。幸いテロリストたちは私に気づいていません。新崎首相も囚われたままです〉

「歩けるのか」

〈歩けません、歩きます〉

電話は切れた。

高見沢は床に両腕を突っ張って、上半身を起こした。

横のバッグからモルヒネを探して打った。判断力は下がるが、痛みで気を失うよりいい。

あとはデスクにつかまって立ち上がった。血は止まっている。モルヒネと慣れで痛みはさほど感じないが、身体に力が入らない。どこまで行けるか分からないが、ここでただ座っているわけにはいかない。その間にも明日香とスーザンは――。

自動小銃を肩にかけると、ドアに向かって歩き始めた。

2

「あなた、何やってるの」

スーザンが明日香に聞いてくる。顔をゆがめ、歯を食いしばっていたのだ。

明日香は答えず、さらに噛みしめる歯に力を入れた。熱が手首にまで伝わってくる。袖口が燃える臭いはするが、炎が結束バンドに当たっているかどうか分からない。手首に当たっているのは確かだ。

明日香の手には、デイパックの横にあったライターが握られている。

「やめなさい。手首が燃えてる」

スーザンの泣きそうな声がした。

明日香は全身の力を込めて引っ張ったが、結束バンドは手首に食い込むだけだ。

「あと少しよ。我慢しなさい」

「我慢してるのは、あなたでしょ」

ライターの火で結束バンドを焼き切ろうとしていたが、服と皮膚の焼ける臭いがするばかりだ。

結束バンドが熱に弱いと言ったのは高見沢だ。彼は嘘を言ったのか。

ドアが開いた。

三人のテロリストが入ってくる。

臭いに気づいたのか、一人が明日香の背後に回った。

明日香の手からライターを取って、その手を蹴りつけた。明日香はうめき声を上げた。

「危ないところだった。この女、結束バンドを焼き切ろうとしてい

た。焼けたのは手の方だが」

明日香に弟を殺されたと言っていた男だ。

男は明日香の腹を蹴って黒くただれた手首を乱暴につかむと、新しい結束バンドで縛り直した。

「このバンドは新素材でできてる。引張強度、耐熱性は最高レベルだ。しかしもう一息だった。残念だったな」

焼けて細くなった結束バンドを明日香に見せて投げ捨てた。

男はもう一度、明日香を殴りつけた。

「根性のある女は嫌いじゃない。だが、どこまでもつか。俺はこの女で楽しむ。おまえらは、あの白人女を好きにしろ」

「ライアンが怒るぜ。あいつは頭に来ると何をするか分からない。俺も東洋女でいい。おまえの後というのはイヤだが、我慢する」

「俺もだ。東洋女は初めてだ」

明日香は倒れたまま、全身の力を込めて男の股間を蹴り上げた。

男はその場にしゃがみ込む。他のテロリストから笑い声が上がった。

男はしばらく股間を押さえてしゃがんでいたが、立ち上がりざま明日香の顔を殴りつける。

「おまえら、こいつを押さえつける。後悔させてやる」

男たちが明日香の頭と両足をつかんで床に押し付けた。

叫ぼうとする口にスカーフが押し込まれた。気道が塞がれ、息をするのがやっただ。

上着のボタンが乱暴に引きちぎられる。

明日香の上に乗るかかってきた男が弾き飛ばされた。スーザンが後ろ手に縛られたままぶつかってきたのだ。

男はスーザンを殴りつけると、口にやはりスカーフを押し込んだ。汗臭い男の身体が明日香にかぶさってくる。

明日香が暴れると男たちの笑い声が響く。身体を押さえつける力はますます強くなる。全身の力を抜き目を閉じた。男の息遣いが耳元で聞こえた。こいつら、必ず後悔させてやる。

その時突然、明日香の身体が軽くなった。

上に乗っていた男が跳ね飛ばされたのだ。目を開けると、壁際に男が倒れ、明日香を押さえていた二人のテロリストが固まったように動かない。

視線を移すと、拳銃を持った男が立っている。銃口にはサイレンサーが付いていた。テロリストが侵入してきたとき、持っていた拳銃だ。

明日香の足を押さえていたテロリストが、壁に立てかけていた短機関銃を取ろうとした。スーザンがその短機関銃を蹴飛ばす。

低い音を立て、新たに現れた男の銃が火を噴くと同時に、二人のテロリストが倒れた。立ち上がろうとするテロリストの頭を明日香は蹴りつけた。テロリストは倒れたまま、動かなくなる。

男は拳銃を床に置くと、ナイフを出して明日香の結束バンドを切った。アレンと呼ばれていた、唯一ブレザーを着て、銃を持っているところを見たことのない男だ。

押し殺した声で言うと、アレンが明日香の方に床の拳銃を滑らせた。明日香は短機関銃を捨て拳銃を取ると、アレンに向けた。

「止めてくれ。もう、銃声はたくさんだ」

「あんたは誰。何をしに来た」

「僕はステイブ・アレンだ。もう、殺し合いはたくさんだ。これじゃ、約束が違う」

男は眩つぶやきながら明日香を見詰めた。

「何とか、人質たちを逃がしてほしい。英語は分かってるんだろ」

「ゆっくり話して。両手は前に」

「僕の間違いだった。こんな男たちの手助けをしたなんて」

「あなたは何者なの。ライアンの仲間じゃないの」

「アラスカ大学の地質学者だ。協力はしたが、仲間じゃない」

「どうということなの。分かるように話して」

アレンは頭を抱え壁にもたれると、そのまま座り込んだ。

「僕の家族はアラスカに住んでいた。妻と二人の子供だ。オーロラが見える美しい町だった。しかし、あるときそれが変わってしまった。シェールオイルとガスだ。僕たちが発見して、採掘した。マスキミに流れた途端、企業が入って来た。本格的な採掘が始まると、子供たちは慢性的な病気になった。腎臓と肝臓が壊死えししていく。地下水が汚染されたんだ」

「その話は聞いたことがある」

スーザンが言った。

「僕の友人がシェールオイル・ガス採掘による土壌汚染の論文を発表しようとしたが、学会からは無視された。その後、何度か公表しようとしたが、友人は死に、論文の行方は分からなくなった。友人はジェームズ・トマスという私の同僚、アラスカ大の教授だ」

アレンの声は震え、目には涙が溜まっている。

「学会は政府と企業の息がかかっているし、シェールオイル・ガス開発の業界は政治家に献金し、政府から保護されている」

アレンは深い息を吐いた。全身に深い絶望と疲れを感じさせている。

「僕にはもう、何も残ってはいない。妻も子供たちも死んでしまった。僕に残されたことは、家族の敵を討つことだ。家族を殺した者と、それと助け見逃した者たちに思い知らせることだった」

アレンは黙り込んだ。目を閉じて考え込んでいる。

「僕がライオンたちに、話を持ちかけたんだ。ある政府高官と組んで。それがこんなことに——」

アレンの目に涙が滲んでいる。

「復讐のむなしさを知っただけだった。ここでも多くの人が死んでいった。いくら、シェールオイルとガスの開発を止めても死んだ者たちは帰ってこない」

「でも、今以上の死者は出なくなる。あなたは間違った方法を選んだけど、亡くなった奥さんと子供たちは許してくれる」

スーザンがアレンの手を取ると、アレンの頬を涙が伝った。

そのとき突然、アレンが顔を上げ、静かにするよう合図した。部屋の外で名前を呼ぶ声が聞こえる。

「仲間がこいつらを探している」

アレンが倒れている三人のテロリストを見た。

「ここを脱出して、人質たちを逃がしてくれ。これ以上の犠牲者が出ない内に」

アレンは明日香とスーザンにすがるような視線を向けると、立ち上がりドアの前に行った。そしてもう一度二人を振り返り、部屋を出て行った。

明日香はアレンの言葉を考えた。他の男たちとは違った男だった。服装も街を歩いている男と変わらない。最初に見たときから違和感を持っていた。だが、すぐには信じ難い話だ。

壁のそばに倒れている三人のテロリストに目を向けた。彼が私を救ってくれたのも事実だ。

「これからどうするの」

スーザンが怯えた目を向けてくる。

「あの人が言った通り。この部屋を出て、人質を脱出させる」

「今度、捕まったら殺される」

「まず状況を連絡する。階段に私のスマホがある。取ってこなきゃ」
スーザンがズボンをたくし上げて、靴下の間に挟んだスマホを出した。

「私のは取られたけど、あなたのは持っている」

明日香は思わずスーザンの頬にキスをすると、スマホを立ち上げ、通話する。

〈無事だったのか〉

横田のほっとした声が聞こえる。

明日香は状況を説明しながらテロリストたちの服を調べた。スマホと手榴弾、ナイフを見つけ、ポケットに入れた。

「現在、三階の中ホール横の小部屋です。スーザンも一緒です」

〈脱出は可能性か〉

「分かりません。スーザンはドナルド大統領の娘です。テロリストたちは、スーザンをドナルド大統領との取引材料として使っています」

スマホの向こうの声が消えている。数秒後やっと返ってきた。

〈その話、本当なのか〉

「私も交渉の場にいました。間違いありません。テロリストはアメリカ政府というより、ドナルド大統領個人と取引をしています。金も要求していると思われれます」

〈直ちに、梶元副総理に知らせる〉

「スーザンが大統領の娘であることは慎重にお願いします」

〈分かっている。大統領の娘とは一緒なのか〉

「横にいます」

〈細心の注意を払って行動してくれ〉

「今までもそうしてきました」

幸運を祈る、という声と共に電話は切れた。

「私のこと、話したの」

スーザンが明日香を見つめている。日本語だったが、自分の名が何度も繰り返されたので察したのだろう。

「大丈夫。私が必ず、あなたをお母さんのところに帰してあげる」
明日香は拳銃をベルトに挟み、短機関銃を持って立ち上がった。

3

「信じられないな」

梶元は思わず呟いた。

警視庁の対策本部で横田からの連絡を聞いていた。

〈プリンセス、スーザン・ハザウェイはドナルド大統領の娘です。

夏目警護官が報告してきました。大統領とプリンセスが話すのも聞いていたそうです〉

「テロリストは、なぜプリンセスが日本の首相官邸にいることを知っていたのですか」

〈そのあたりのことはまだ分かりません〉

「新崎総理についての情報はないのですか」

〈救出に向かうと言っていますが、過大な期待は難しいかと思いません〉

「他に打つ手はあるのですか。我々はすべてに失敗したが、彼女は

よくやっています」

〈私もそう思います。できる限りの援護をします〉

横田警部からの電話は切れた。

「副総理、官邸からです」

警視総監が受話器を梶元に差し出した。

ライアンの声が聞こえる。

〈屋上に燃料を満載にしたヘリを三機よこしてもらおう。東京湾の東京ヘリポートに待機させる。こちらからの指示で直ちに飛ばせる用意をしておけ〉

「パイロットはどうなります」

〈余計な心配はするな。追跡装置を付けたら、下手な小細工はなしだ。大きな犠牲を払うことになる。総理と国務長官、その他数名を人質として連れて行く。アメリカも日本も手を出さない方がいい。その場合、人質は――〉

シュツ、とライアンが鋭い音を出した。首を切ると言っているのか。

梶元は承諾するしかなかった。

この男は夏目警護官が横田に電話をしたことは知らないのか。一度は捕らえられた彼女がプリンセスを連れて脱出しているはずだ。〈一億ドルの準備は出来ているか。我々が連絡をすればただちに、振り込む用意をしておくんだ〉

「人質はどうなる」

「心配ないと言ってる。要求を守れば傷つけない。振り込みが確認できれば、俺たちもここには用はない。ヘリで退散する」

電話は切れた。スーザンの名前は出なかった。彼らはまだ、我ががスーザンが大統領の娘だと知っていることに気づいていない。

テロリストからの要求は、直ちに現場部隊にも知らせられた。

外堀通りに並んだ輸送車の一台に遠山記者と純次がいた。明日香の両親は近くのホテルの一室に保護されている。

純次は遠山と一緒にいることを希望したのだ。

「おかしいと思わないの。テロリストはヘリでどこに逃げるといふの。日本中の人が見てるし、レーダーだってGPSだってある。どこに逃げても、必ず発見され追跡される」

純次が一気に言うのと遠山は考え込んでいる。

テロリストがヘリの用意をさせていることを遠山が聞き出してきたのだ。

「じゃ、テロリストたちは、どうやって官邸を脱出するつもりだ」

「そんなの僕にも分からないよ。テロリストじゃないもの」

「じゃ、テロリストになった気で考えろ」

「もう考えてる。僕たちを狙ったテロリストが都内のどこかにいるんでしょ。彼らと合流するってことはないの。たとえば彼らが別の方法を用意してて、一緒にドロロンする」

「おまえはヘリはカモフラージュだと言うのか」

「そんなの分からないよ。でも僕だったら、ヘリには怖くて乗れないってこと。いつ撃墜されるか分からないし。必ず居場所は把握される。広いアメリカとは違って、誰かが空を見てる。逃げ切れるとは思えない。彼らはプロなんでしょ」

「横田に話してくる」

遠山は輸送車を出た。純次が慌てて後を追ってくる。

この純次という女の様な話し方をする男は、けっこう使えるのかもしれない、と思い始めていた。

横田は指揮車にいた。遠山は横田に純次の考えを話した。

「確かにヘリでの逃亡は難しい。官邸には他の抜け穴はないのか」

「国会と官邸をつないでいるトンネルがあるが、S A Tを送り込もうとしてテロリストに破壊された」

「そんな話は聞いてないよ。S A Tはどうなったの」

「あとでゆっくり話してやる。ちょっと黙ってる」

遠山は純次の肩をつかんで後ろに下がらせた。

純次が指揮車のデスクにある地図を見ている。

「昔は国会と公邸がトンネルで結ばれてたんでしょ。官邸じゃなくて。戦時には防空壕代わりにもなると掘られたって、何かで読んだことがある。いつから国会と官邸がつながったの」

「そんなに昔じゃない。官邸が新しく作られたときだ」

東京オリンピックを前に、トンネルは官邸南側を走る首都高速道

路の建設で寸断され、人目に触れぬまま埋め戻されたと聞いたことがある。

横田が地図に×印を付けた。公邸のすぐ近くだ。

「ここでトンネルは埋め戻されている」

「もし、まだ埋め戻されていないければ。政府がそんな無駄なことをするとは思えない」

「記録にはそうある。だから——」

「公邸からのトンネルが残っていれば、公邸まで行けば国会に出られるわけだね。五分かからない」

横田の言葉を見無視して、純次が指でたどった。

「ということは、官邸から公邸まで行って、この道を使えば国会までたどり着けるといふことだ」

横田が呟くように言う。受話器で話していた部下が横田の耳元で何事か囁く。ささやく

「おまえらの言葉は考えてみる。これから警視庁本部との打ち合わせが始まる」

遠山に指揮車から出るように合図をした。

遠山は純次と指揮車を出た。

輸送車に戻り、純次が考え込んでいる。

「どうかしたのか」

「やはり納得いかない。微妙に現実とは違う気がする」

「どこがどう違う」

「やはりへりを用意させ、それで逃げるなんてバカげてる」

「非現実的と思ってるのか。俺だってそうだ。しかし、実際にテロリストが要求してきた。今、東京へりポートに待機している。総理や国務長官を連れて行く気だ。うかつに手が出せん」

「あまりにありふれてると思ってる。へりで逃げるといっても、どこに逃げるの。どこに逃げてもGPSで突き止められる」

「テロリストはGPSをすべて外すように指示してきてる」

「彼らがそれを信じると思ってるの。はいGPSは取り外しましたって言うだけで。内部の装置に組み込めば調べても分からない」

「俺が言ってるんじゃない。テロリストが言ってるんだ」

「彼らはへりで逃げると思わせておいて、トンネルを使って外部に逃げて、都内に潜む仲間と合流するというのはどう」

純次が遠山を見ている。

「やはり都内のアジトを見つけることが先決だな。おまえ、姉さんと話したんだろ。姉さんは何か言ってなかったか」

「話す時間なんてなかった。私たち三人の命に係わることだから、もう電話はするなって言われた」

遠山の動きが止まり、純次を見ている。

「三人って言ったのか。それが確かなら、姉さん以外に二人いることになる」

「そうだね。誰なんだろう」

「もっと、調べたほうがよさそうだ」

遠山は考え込んでいる。

明日香のスマホが震え始めた。横田だ。

〈梶元副総理からテロリストの要求を知らせてきた。彼らはヘリで逃亡するつもりだ〉

横田は要求があり次第、ヘリを官邸の屋上に向かわせることと、すでに東京ヘリポートに待機していることを告げた。

〈そのとき、総理と国務大臣、そして何名かの人質を連れて行く。必ず大統領の娘も含まれる〉

「すぐにこの部屋を出ます。何とかやってみます」

明日香は口には出したが、何をどうするかは分からない。

ドアノブに手を掛けたとき、足音がドアの前で止まった。

拳銃を構えてドアの陰に隠れた。

ドアが開き、男が入ってくる。スーツ姿の男だ。

明日香は男の背後に回り、喉にナイフを突きつけた。

「アンダーソン 国務長官」

スーザンが声を出した。

「どうしてここに——」

「アレンが手配してくれた。少し前にここに来た男だ。今も外で見張っている。人質の中でも私は比較的自由だ。気分が悪くなって、医務室に行くことになっている。君たちのことはアレンに聞いている。何とかして、人質を助け出してほしい。もう多くの時間はない」

国務長官の声は震えている。

「その努力をしています。ライオンたちは屋上にヘリを着陸させ、それを使って脱出するようです。そのとき、新崎首相とあなたを人質として連れて行くと言っています」

「それはウソだ。彼らはヘリは使わない。危険すぎる」

国務長官は明日香からスーザンに視線を移した。

「なぜそれを——」

「彼らを手引きしたのは私だ」

明日香は次の言葉が続かない。英語を聞き間違えたか。

スーザンも目を見開いて、国務長官を見ている。

「国務長官、なぜあなたが——」

スーザンからかすれた声が漏れた。

「二ヶ月前のことだ。私はアレンと会って、真実を聞かされた。シエールオイル・ガス開発にまつわる話だ。新しい採集装置で使われた薬剤による土壌汚染が、水質汚染を引き起こし、大勢の被害者が出ている。ホワイトハウスはそれを隠蔽いんぺいしようとしている」

「いかにも大統領——政府がやりそうなこと」

スーザンがあわてて言い直したが、顔をしかめた。

「テロリストのホワイトハウスへの要求は知っているか」

「日本には一億ドルと一万人の難民受け入れです」

「アメリカへは二億ドルとシエールオイル・ガス開発の差し止め、それにジェームズ・レポートの公開だ」

「アレンの同僚、アラスカ大の教授の論文ですね」

国務大臣がスーザンに頷く。

「アラスカでのシェールオイル・ガス開発の実体を暴いた論文だ。土壌汚染と水質汚染に関して書かれている。これが公表されれば、シェールオイル・ガス開発のプロジェクトは中止される。私とアレンの目的はこれだ」

「なぜ、国務長官のあなたがそんなことを。しかも大統領はあなたの幼馴染で、親友と聞いています」

「アラスカで私の妹が死んだ。その二人の娘もだ。全身に黄疸おうだんが出て痙攣けいれんをおこし、苦しみながら死んでいった。肝臓と腎臓に異常が出る。アレンとは妹たちが入院していた病院で知り合った。彼の家族もそこにいたんだ」

国務長官は苦しそうに頭を振った。

「他にも同じ症状で死んだ者は多いと聞いている。私はきみが大統領の妻の娘だと知って、この計画を助けることにした。ライアンたちは金、私たちはシェールオイル・ガス開発プロジェクトの中止が目的だった。しかし、私の間違いだった。どこで計画が狂ったのか」

「なぜ、私が大統領の娘だと知ったの」

「偶然だった。いや、そうではない。神が導いた必然だったのかも知れない。私の友人であり顧問弁護士の事務所で、きみの母上、ナンシー・ハザウェイが働いていた。弁護士助手としてね。夜間は大学に通い、いずれは弁護士になりたいと言っていた。娘の話が出て

ね。私は興味を持って、きみのことを調べた。母上のこともね」

国務長官はスーザンを見つめた。

「きみは意識したことはあるかね。自分がドナルド大統領に似ていることを」

スーザンは一瞬躊躇ちゆうちよしたが、首を横に振った。

明日香は改めてスーザンを見た。最初見たときに感じたのは、このことだったのかと思った。今までは誰もが思いながら、声高こわだかに言わなかったのかもしれない。

「私は大統領の母上も知っているんだ。いま百歳に近いが、若いころの写真も見ている。大統領執務室に飾ってある。実にきみによく似ている、スーザン」

「そんな話——私は信じない」

スーザンがかすれた声を出す。

「大統領は心底悪い男ではないが、利己的で独善的だ。ときに自分の利益が優先する」

「それだけで十分悪い奴——」

「我々は幼馴染で友人だった。私が彼の暴走を止めることができれ
ばと思って国務長官を引き受けた」

「無理だったんでしょ。だから別の方法を取った」

「私は手段を間違ったようだ。抗議するなら、私自身が正面から向
かうべきだった」

国務長官が苦しそうに言い、さらに続けた。

「官邸には爆薬が仕掛けられている。そのことを伝えるために来た」
明日香の顔色が変わった。

「官邸を完全に破壊するのに十分な量の爆薬だ。その混乱に紛れてテロリストは都内の隠れ家まで逃げる。そのテロリストと合流して関西に向かい、海外に出るつもりだ」

「爆薬を仕掛けた場所は分かりますか」

「調べてみる。全力は尽くすが、見つけられるかどうか分からない。
私の行動も見張られている」

「國務長官はこれからどうするつもりです」

「ライアンと話してみる。人質を逃がす手助けをする」
ノックの音がする。

「アレンだ。行かなければ。誰か来た合図だ」

國務長官はもう一度スーザンと明日香を見ると、出て行った。

4

「これからどうするの」

スーザンが聞いてくる。

「時間がない。テロリストの日米の指定口座に金が振り込まれ次第、ライアンは脱出に掛かるはず。まず、自分たちが安全圏に出て、爆破を指示する。爆発の混乱に紛れて、自分たちは官邸を脱出する。

それはヘリでじゃない。ヘリはおとし——」

スーザンに話しながら頭の中をまとめようとした。

まず国務長官の言葉を横田に伝えなければ。明日香はスマホを手
に取った。

「テロリストたちは官邸に爆薬を仕掛けています。官邸を離れると
同時に、官邸を爆破して、その混乱に紛れて都内のアジトに逃亡す
るつもりです」

明日香は声を低くして言う。

迷ったがアンダーソン国務長官については話すのをやめた。今は
爆薬の発見が一番だ。いずれ時が来れば彼が自ら話すだろう。その
覚悟はできていると感じた。

〈爆薬を仕掛けた場所は分からないのか〉

「官邸を爆破して大混乱を起こすのが目的です。一ヶ所とは限りま
せん。おそらく複数です。たとえ発見しても、私には解除できませ
ん」

〈都内のアジトは分かるか〉

「分かりません。初めて聞く話です」

〈全力を尽くしてくれ。希望はきみだけだ〉

明日香は通話を切ると短機関銃をつかんだ。

「行くよ」

スーザンの腕をつかんで引き起こした。

梶元副総理は全身から血の気が引いていくのを感じた。

倒れそうになるのを精神力だけで支えていた。身体は疲れ切っているが、神経は妙にはつきりしていた。

耳の奥には横田の言葉が残っている。

テロリストたちは官邸を爆破するつもりです。たった今、夏目警護官から連絡がありました。既に爆薬が官邸にセットされている模様です――。

梶元はすぐに警視總監と警察庁長官に、横田の言葉を伝えた。

「官邸から半径三キロ内にいる住人たちに、ただちに避難命令を出してください。理由は――言う必要はありません。いや、何事にも理由が分からなければ、不安を抱くだけだ。私が話します」

梶元は都民に向けて話すための準備をするように指示した。

「そんな時間はありません」

「必要なことです。警視庁の情報として事実を伝え、避難を促します」

下手な隠しごとはよそう。梶元はそう決めて、秘書に指示した。

「おまえの姉さん、頑張ってるな」

遠山は純次に言った。

明日香から連絡があったことを、横田が遠山に話したのだ。遠山から明日香の無事が家族に伝わることを見越してだろう。内容は極秘だと念を押されていたが、官邸に仕掛けられた爆薬については、梶元から国民に伝えられた。

二人は外堀通りに止められた輸送車に戻っていた。窓からはすぐ近くに官邸が見える。

「しかし、驚いたな。官邸を爆破して混乱に乗じて逃げるとは。へりは囷だ。おまえの考えが正しかった」

「官邸占拠の話聞いたときから、おかしいと思ってたんだ」

「今さら何を言い出す。何がおかしいんだ」

「普通、大規模な犯罪は逃げることを前提に計画を練るでしょ。自爆目的でない限り。官邸を占拠したテロリストグループは五十名以上。どうやって衆人環視の中から逃げるんだろう。おまけに、大量の武器で武装してるでしょ。自動小銃、手榴弾、ミサイル。そんなの日本じゃ手に入りっこない。どうやって持ち込んだんだろう。疑問だらけ」

「そうでしょう、という顔で純次が遠山を見ている。」

「外国から持ち込むしかないな。しかしどうやって——」

「日本の税関を通れるわけがない。外国貨物でも無理でしょ。半端な量じゃないし。X線にかければ一発だ。じゃ、どうやって——」

「入管だって節穴じゃないぞ。ひと癖もふた癖もありそうな連中だ。グループじゃ、まず怪しまれる。あいつら、どうやって入国したんだ」

「遠山は考え込んでいる。」

「入国した後だって、五十人以上の外国人がしばらく日本で暮らしてたはずでしょ。彼らはどうやって日本に来て、どこにいたのよ。」

都内に潜んで、準備してたんでしょ。いろんな装備だって、保管しておかなきゃならないし。警察やマスコミは何か気付かなかつたの」
純次が遠山に繰り返し聞いてくる。

「拳銃や短機関銃、ロケット弾やステインガーマサイルまで持ち込んでる。税関を通りっこないでしょ。日本国内じゃ手に入れるのは絶対に無理。じゃ、どうやって日本国内に持ち込んだの」

「だったら——」

遠山は純次を見た。純次も遠山を見ている。

「アメリカ軍」

二人は同時に言った。それしか考えられない。

「テロリストたちはアメリカ軍の輸送機を利用した。装備を隠しテロリストが実行日まで隠れていたのは、米軍基地内だ」

遠山は考えながら言う。

「俺たちの手には負えないな」

呟くと、スマホを出した。

遠山の電話を聞いて、横田は二人を指揮車に呼び出した。

「夏目警護官と他の二人は、無事なのか」

「極秘事項だ。さっきの話、もっと詳しく話してみる」

横田は純次の方をしきりに見ている。純次が明日香の弟だということを感じているのだろう。

遠山は純次の考えを横田に話した。横田は考え込んでいる。

「アメリカ軍に、おかしな便はなかったか問い合わせる」

「都内にアジトもあるはずだ。俺たちを襲った外国人については、捜査はしているのか」

「所轄しよかっがやってる。ただし、ほとんど人は割いていない。警視庁は官邸占拠事件で手いっぱいだ」

「都内に潜伏している仲間が逃亡を手助けするんじゃないか。ヘリでの脱出は囿だ。テロリストの奴らはまず官邸を爆破する。そのどさくさにまぎれて公邸からトンネルを通って国会に出て、いったんアジトに逃げ込む。それから仲間の手を借りて日本を脱出する」

横田の顔色が変わった。

スマホを出して、指示を出し始めた。

「手の空いている者は全員、都内の怪しい場所をローラー作戦だ。直ちにかかってくれ」

「そんなんじや、時間がかかりすぎる。今は時間がない」

純次が横田と遠山の両方を見た。

「そんなこと分かっている。でも他に方法はあるのか」

「官邸、いや国会からさほど離れてなくて、数十人規模で隠れることのできる場所。やみくもに探すより、当たりを付けておいた方が確実でしょ」

「分散して隠れてたらどうする」

「テロリストは日本語や日本の習慣なんて知らない。少人数で行動して、トラブルを起こしたらアウト。そんな危険を冒すより、団体

行動の方が効率的でしょ」

「おまえ、分析官になれるな」

「僕はゲームの開発者になるつもり。ゲームじゃ、いろんなケースを考える必要があるんです。次々に障害を作り上げる」

純次が横田に視線を移した。

「テロリストは混乱を引き起こすために官邸を爆破しようとしてるんでしょ。混乱は大きければ大きいほどいい。僕だったら、都内の複数の場所にも爆薬を仕掛けて、同時に爆発させる。都内は大混乱におちいる。その隙に乗じて逃亡するってのは。僕だったら絶対そうする」

純次が言うのと冗談のように聞こえるが、あり得ない話ではない。

「都心で複数の場所で爆発が起これば、そのパニックぶりは半端じゃない。警察、消防が出勤して、大混乱が起こる。考えるだけでゾクゾクする」

純次がたたみかけるように繰り返す。

官邸の外にいるテロリストが夏目一家を襲って以来、彼らの消息はつかめていない。

「聞いてただろ。彼らのアジトを見つけろんだ。テロリストが乗っていた車をもう一度調べろ。付近の防犯カメラもチェックするんだ。都内の検問を徹底しろ。今までに不審な車はなかったか。最近拘束した者の中に不審者はいないか。直ちに報告しろ」

横田は車内の部下たちに怒鳴るように言う。部下の何人かは指揮

車を飛び出し、残りはスマホを出して電話を始めた。

「ひと月前にさかのぼって、アメリカからの入国者も調べる。夏目が送ってきたテロリストのスマホの情報がある。テロリストに関係ありそうな情報を見つけ出せ。徹底的に調べるんだ」

横田は遠山と純次に向き直った。

「米軍が絡むと、警視庁だけでは無理だ。政府の交渉事項だ。時間がかかる」

横田はスマホを出して、送話口に向かって今までの話を手短かに話した。

「すべての情報をアメリカに送って、問い合わせてください。特にテロリストに関する情報を。都内のアジトが分かるかも知れません」

「誰に電話した」

スマホを切った横田に遠山が聞く。

「梶元副総理だ」

ぶつきらぼうに答えると、横田は部下を連れて指揮車を出て行った。

5

梶元は電話を切ると、警視總監と警察庁長官、防衛大臣を呼び、横田からの電話の内容について話した。

「人数は約五十人。荷物は武器です。拳銃から短機関銃、手榴弾。

ステインガーミサイルやS M A W ロケットランチャーなど、官邸を占拠しているテロリストたちが持っているものです」

「アメリカ軍の通常兵器です。米軍の輸送機を使えば、日本国内に持ち込むのは問題ありません。基地に着いてからは、外に持ち出すのも、内部の手引きがあれば可能でしょう。人についても出入りは簡単です」

「ただし、アメリカ軍の輸送機に人員と武器を積んで日本に運ぶ許可を出すことができるのは、軍にかなり深く入り込んでいる者にかできません。そういう者を調べることはできますか」

「防衛省と外務省の協力が必要でしょう。運んだ場所と時期が分かれば可能はずです。まずは日常とは違う動きを調べてもらいます」
「時間がかかりそうですね。だが我々には時間がない。ホットラインは使えますか。相手はドナルド大統領です」

梶元は秘書に聞いた。

「もちろんですが、あれは非常時に対応するための――」

「今がそのときです。記録も残しておきたい。ただちに用意をしてください」

待機していた通訳が呼ばれた。ホワイトハウスとの直通電話だ。

「一人にしてくださいませんか」

梶元は部屋にいるスタッフに向かって言う。

全員が出て行った後、梶元はドナルド大統領に状況を話し、協力を求めた。

「これは人質を無事救出するためには必要なことです。あなたの娘、ミズ・スーザンを含めて」

大統領は黙って話を聞いていたが、全面協力を約束してくれた。スーザンの名を言ったとき、聞こえていた息遣いがわずかに変わった。動揺が伝わってくる。

「だがこれは、軍の機密事項に関することです。内密にしておいてくれないか」

「了解しました。今はかかるべき事態を収拾することが第一です。その代わり、最大限の協力をお願いしたい」

大統領は内心ではテロリストが、アメリカ軍を利用して日本入国をしたと予想していたのかもしれない、と梶元は思った。

「アメリカ側は国防副長官が窓口になるそうです。至急、テロリストの日本への入国ルートを調べるそうです。日本の米軍基地に入っ
てからの足取りもです。日本の捜査機関も全面協力をしてください」

梶元の言葉で、警視庁対策本部は急にあわただしくなった。

現場本部の代表として、横田が警視庁に呼ばれた。

一時間後には、横田基地の在日米軍司令部から返事が来た。

「三十六名の部隊と二十七名の傭兵部隊を二度運んでいます。ノースカロライナ州のゴールズボロからです。彼らはシーモア・ジョンソン空軍基地から横田基地を経由して、現在、韓国とイランとアフガンに行ってるはずですよ」

対応した警視庁職員が、送られてきた資料を見ながら報告する。

「行ってるはずというのは？」

「実際にそっちにいるかどうかは、先方に問い合わせしてほしいということですよ。自分たちは指示通り運行した。傭兵部隊は必要があれば乗り込んでくる。傭兵部隊の記録は残らないこともあるそうです」

「正確なことは分からないということですか」

横田が確認した。記録が残らないとは、警視庁内部では考えられないことだ。軍と警察の違いだけではないのだろう。傭兵部隊という特殊性もあるのだ。

「世界を移動しても米軍基地を渡り歩いていく限りは、家の中を歩き回っているのと同じだそうです。部屋から部屋へと。パスポートなんて必要ない。アメリカ軍の基地から基地へと移動するだけ。入国審査なんて受ける必要はないそうです。しかも基地から外に出るのは、アメリカ兵であれば簡単です」

「武器の持ち込みはどうやって」

「傭兵部隊の荷物に関してはノーチェックです。正規の軍人扱いのようですよ」

「やはり記録はないんですか」

「完全武装のいち兵士として扱われています。細かい武器のチェックはないそうです」

「おそらく、彼らに間違いないと思われまます」

「アメリカの傭兵訓練企業から、日本に完全武装のテロリストが送り込まれてきた。彼らは今、総理と国務長官、そしてアメリカ大統領

領の娘を人質に取り、首相官邸を占拠している。と考えていいのですね」

梶元の皮肉を込めた言葉に職員が頷く。

「ただちに、適切な処置をしてください。どのような手段をとつても、責任は私が負います」

梶元は横田に向かって言った。

ドナルド大統領は何度目かの時計を見た。まだ、一時間しか進んでいない。しかし、すでに半日はすぎた気分だ。おまけにこの二日間はほとんど寝ていない。

地球の反対側に近い場所、時差としては十三時間進んでいる日本で、娘がテロリストに囚われていると思うと眠れるものではなかった。おまけにテロリストは大統領が受け入れるには致命的な要求を突き付けてきている。

大統領の脳裏に日本の副総理の言葉が浮かんだ。あなたの娘、ミズ・スーザン——。いつ、誰から聞いたのだ。

首席補佐官が入ってきた。

「日本からテロリスト数人の情報が届いています。写真とフルネームです。男たちの関係者や関係機関について捜査を開始しています」
「日本で官邸を占拠しているテロリストは、やはりアメリカ国籍を持つアメリカ人だというのか」

ほぼ間違いないと思ってはいたが、実際に告げられると動揺した。

軍関係のアメリカ人が自国の国務長官と大統領の娘を人質に取り、アメリカ合衆国大統領を脅している。シヨックを隠し切れず、部屋中を歩き回った。その姿を首席補佐官が目で追っている。

「マズいですね。しかし、隠しきれるものじゃない。何とかこれを利用する方向にもっていきましょう」

「どうということだ」

「すでに国内にまで多くのテロリストが潜伏しています。そのテロリストが国外に出て、警備の薄い国でアメリカの政府高官を人質にとって国をゆする。移民政策、出入国審査をさらに厳しくするべきではないですか。大統領の公約の一つです。議会では拒否されましたが、今度は国民自らが希望するでしょう」

首席補佐官が言うが、今の自分にはそこまで頭が回らない。目先の問題に対処するのが精いっぱいだ。

「日本側の情報を活用して、最優先でテロリストの供給先を特定するように」

大統領のスマホに直接、電話をしてくるテロリストの男を発見できるかもしれない。男が特定できれば、ただちにFBIを送り込み逮捕する。

「官邸から連絡です」

梶元は秘書が差し出す受話器を取って、スピーカーにした。

「金の振り込みの用意はできたか。ここに人質が一人いる。おまえ

の返事しだいで日本国民が一人減る」

男の声の背後で女性のすすり泣きが聞こえる。

「振り込み先はどこです。その前に人質の半分を解放してください。

その後——」

梶元の言葉が終わらないうちに、銃声が聞こえた。梶元の身体がびくりと反応した。

「要求はこちらからだ。次の電話で振り込み先を連絡する。ワシクリックで振り込み完了できる用意をしておけ」

「女性は——」

ボデイ——遺体を始末しろ、という言葉の後、電話が切れた。

梶元の身体が震えだした。あの女性は私が殺した。そう思うと震えが止まらなくなった。これほどまでに簡単に人を殺すことのできる奴らだとは——。

「人質が殺されたのですか」

「聞いていた通りです。これ以上引き延ばすことはできません。金の振り込みの用意をしておいてください。次の電話では振り込みが要求されます。遅れると——」

「しかし振り込みと同時に、総理と他の人質に何が起こるか分かりません」

「私にはこれ以上、引き延ばすことはできない。あの女性は私が殺したと同じことです」

梶元の顔は蒼白になり、声は震えていた。人命など、何とも思っ

ていない奴らだ。テロリストの要求をすべて飲んだとしても、人質の命はどうなるか分からない。しかし、今は従うしかない。

梶元はデスクにつきまわりながら、やっとの思いで立ち上がった。

(つづく)